

定家の「いひしる」の考察

佐藤茂樹

本稿は定家の歌合判詞における「いひしる」について考

察するものである。「いひしる」は「ものの言い方を知っている。口のきき方を心得ている」(『日本国語大辞典』)更に、「内容に即して的確に表現している」(『角川古語大辞典』)と説明される。歌論的には、歌としての表現を知っている、歌としての確に表現されているという意味だと考えられる。本稿では、和歌表現としての心得、その的確性を具体例を通して考え、「いひしる」の内容を考察することとする。対象とする歌合は、衆議判も含め、定家判とするに足ると安田章生氏が示された、九種の歌合とする。

一

(1) 『千五百番歌合』 八百六番 秋四

左勝 有家朝臣

みるたびにおらまほしきは唐錦たつたの山の紅葉なり

けり

おらまほしきは唐錦なとこひねかはるへくは侍らねとふるき歌おほえてひとつの姿にはいひしりてきこえ侍にや

判詞からは、「おらまほしきは唐錦」なのか、一首なのか、何に對して「いひしる」と評したのかは明確とはいえない。但し、判詞を素直に理解すれば、中心は「ふるき歌おほえてひとつの姿にきこえ侍」である。「ひとつの姿にきこゆ」ことをより具体的に言い表したのが「いひしる」であると解される。分かりやすく判詞を解すると、一首は、優美さを欠く表現があるが、古歌を思い出させる点で、一つの姿を有すと言え、そこには「いひしる」表現がなされているということだろうと思われる。即ち、古歌を思わせる表現に「いひしる」を見ているのである。判詞に言う「ふるき歌」とは、

①唐錦たつたの山も今よりはもみぢながらにときはなら
なん

〔後撰〕秋下・三八五 つらゆき

②などさらに秋かとはむからにしきたつたの山の紅葉
するよを

〔後撰〕秋下・三八九 よみ人しらず

に見えるような立田山の唐錦の如き鮮やかな紅葉を詠じた歌のことである。このような古典的伝統的とも言える景が、例歌には腰句以下に「唐錦たつたの山の紅葉なりけり」とそのまま詠み込まれている。この点に関して、

『歌合』 建保二年八月十六日 九番 秋風

左 定家卿

袖ぬらす忍ふもちすりたかためか乱てもろき宮城の、
露

左のしのふもちすり。古きみたれをき所もかはらす。めつらしき所侍らねは⁽²⁾

という例がある。例歌も『後撰集』三八九歌と比較して、「をき所もかはらす。めつらしき所侍らす」と評されてもおかしくはない。しかし、この例歌にあつては、こうした否定的な判詞を受けることはなかった。定家は、『近代秀歌』において、

「いその神ふるきみやこ」「郭公なくやさ月」「ひさかたのあまのかぐ山」「たまほこのみちゆき人」など申

すことは、幾度もこれをよまでは歌出で来べからず。と言ひ、枕詞を用いた伝統的とも言える叙景表現に対しては、その踏襲を認めている⁽³⁾。

「唐錦たつたの山の紅葉」は言い換えることの出来ない表現と考えられるため、否定的評価を受けることなく、逆に、古歌の表現そのものではあるが、その正統とも言える古典的叙景表現による確かな表現に対して、「いひしる」と評されたものと思われる。

(2) 『百首歌合』 三番 春

左 勝 権大納言公経

青柳の糸をみとりによりかけてあはすは春に何をそめまし⁽³⁾

糸をみとりによりかけてなど。いひしりて侍を。あはすはといふは。かた糸にてや。ことはり叶へきと。右方少少申人侍しかと

「糸をみとりによりかけて」を「いひしりて」と評している。「青柳の」は八代集、十八例全て、「青柳の糸」として詠まれており、「青柳の糸」は決まり文句的詞つづきであり、例歌は「あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のはこるびにける」(『古今』二六・春上 つらゆき)のようによく似た表現を有す歌がある。

例歌は『古今』歌の「あをやぎのいとよりかくる」に「みどり」を言い加えることで、『古今集』の「青柳が糸をよつてかける」⁽⁴⁾という表現内容に色彩上の具体性を示したと言える。このように、古歌である『古今』二六歌の伝統的表現に即している点から、「いひしる」と評されたものと思われる。「いひしる」とは、古典的伝統的表現形式を規範としており、そのまま表現を踏襲していない場合、伝統的表現形式を逸脱することのない程度に変化が加えられている、単純明快な表現に対して評せられることがわかる。

二

(3) 『宮河歌合』 廿一番 左

真管生ふる荒田に水をまかすればうれし顔にも鳴く蛙かな

左右、心姿おなじさまの事に侍るべし。「荒田に水を」といひ、「空手に過ぐる」といへる、いづれも云ひ知りてきこえ侍れば、よき持に侍めり

左歌の第二句の「荒田に水を」に「いひしる」と評している。短い句ではあるが、同類表現を八代集には見ることが出来ない。但し似た着想の表現を有す歌として次の二首をあげることが出来る。

① あらをだにほそたにがはをまかすればひくしめなほにもりつつぞゆく (『金葉』春・七三 大納言経信)

② はるの田にすきいりぬべきおきかな (僧正深覚)

かのみなくちにみつをいればや 宇治入道前太政大臣

(『金葉』雜部・六五一・連歌)

①は「荒(小)田」に「細谷川」(即ち「水」)を「まかすれば」、②は「(春の)田」に「水」を「入ればや」であり、発想としては例歌と似通う所がある。とりわけ、「わすらるる時しなければ春の田を返す返すぞ人はこひしき」(『拾遺』恋三・八一 一 つらゆき)、「あづさゆみ春のあら田をうち返し思ひやみにし人ぞこひしき」(『拾遺』恋三・八一 二 よみびとしらず)に見えるように、比喩による序詞表現の存在を見ると、例歌と『金葉集』二例は「田」を比喩的に扱わないで、実景として捉えており、素朴であることがかえって、写生的な印象の鮮明さを一首に与えるという共通点が見られる。但し、相違することは、例歌の表現は「金葉」歌に比べて、簡潔であるということである。この例においては、(1)(2)の例のように先行歌の表現のままではなく、発想を受け継ぎながらより簡潔な表現として詠み、対象を正面から捉えている。表現上の修飾を排した、意を通じさせるための最小限の詞による表現だが、そうし

た表現にも先行歌に同類的表現をもつという、表現上の確かさを認めることが出来、そこに「いひしる」の意味があると思われる。

(4) 『百番歌合』 八七番 恋

右 雅経

秋の田のわさほのかつらゆふかけて結ふ契はかりになし

右わさほのかつら。いひしりてことよろしく聞え侍るを

「わさほのかつら」は八代集中には、その用例を見ることが出来ないが、『万葉集』に「吾妹子が業と造れる秋の田の早穂の髪見れど飽かぬかも」(二六二五 大伴宿祢家持)の一例があるが、この歌は『古今和歌六帖』では「はつほのかつら」となっていることから、当時は「わさほのかつら」ではなく「はつほのかつら」として認識されていたと思われる。例歌は『古今和歌六帖』の「あきのたのはつほのかつら」に想を得て、「秋の田のわさほのかつら」と詠み改めたものである。又、『万葉集』には「吾が蒔ける早田の穂立造りたる髪ぞ見つ、偲はせ吾が背」(一六二四 大伴宿祢家持)があり、『万葉』歌の「早田の穂立造りたる髪」を圧縮したのが、例歌の「わさほのかつら」であったと考

えられる。このように例歌の「わさほのかつら」は『古今和歌六帖』の明快な表現の踏襲であり、又『万葉』歌の表現を凝縮することによって単純明快と言ひ得る表現を獲得したとも考えられる。どちらにしても、誤解の余地のない明快な表現であり、古歌の影響下に発想されている点で確かな表現と言ひ得る。

(5) 『光明寺撰政家歌合』 五一番 寄枕恋

左 勝 家長朝臣

浪枕たかせのよとにさす棹のさてや恋路にしほはつへき

左高瀬のよと。さてや恋路に。いひしれる歌と聞ゆとて。為勝

「たかせのよと」「さてや恋路に」に対して、「いひしる」と評している。「高瀬」「淀」の用例はあっても、「高瀬の淀」という詞つゞきは、『万葉集』、八代集を通して例を見ることは出来ない。同時代の『新古今集』七二歌(建仁元年三月歌合)、「たかせさすむつだの淀の柳原みどりもふかくかすむ春かな」(春上 権中納言公経を参考歌としてあげる)が出来る。上句「たかせ(さすむつだ)の淀」の凝縮されたのが、例歌の「たかせのよと」と考えられるのである。三十一年前とはいえ、同時代であるため、公経歌を

古歌と同等には扱えないが、簡潔明瞭な表現として「たかせのよと」を解することが出来る。又、「よと」は「の淀」の詠まれ方としては、参考歌とした『新古今』歌以外に、「真野の浦のよど」（『万葉』四九〇）、「七瀬の淀」（『万葉』八六〇・一三六六、『金葉』六八九）、「山しろのよど」（『古今』七五八、『新古今』一一一八）、「むつ田のよど」（『千載』九五五）、「なつみの河の川よど」（『新古今』六五四）と詠まれている。「地名＋よど」、「川に關係のある詞＋よど」であり、「たかせのよと」も同じ着想にあると言える。表現上の安定性がうかがえるのである。

又、同じく「いひしる」と評された「さてや恋路に」についても、同類表現は『万葉集』、八代集中には見られない。「さてや」については次の二例（一例は長歌）を見ることが出来るが、

①……春くともさてややみなむ年の内に……（『拾遺』雑下・五七四 東三条太政大臣）

②ほととぎすたづぬばかりのなのみしてきかずはさてややどにかへらん（『後拾遺』夏・一八〇 堀川右大臣）
「さても」は二七例が多い。「さても」と「恋路」との詠み合わせについても例はなく、「さてや恋路に」はありふれた表現とも思われるが、前例がないだけに目新しくも

あったと思われる。「さて」を用いた表現の語形成は、「さてもやうきと」（『古今』七五〇、『拾遺』九九五）、「さてややみなむ」（『拾遺』五七四）、「さてはすむやと」（『拾遺』六七〇）、「さてもやねぬと」（『拾遺』一九〇）、「さてもあふてふ」（『後拾遺』九四四）のように、三代集では「さて＋用言」という形が一般的である。その傾向は『金葉集』まで続くが、『千載集』においては、「さてもはつねや」（一五四）、「さてもや秋は」（三三二）、「さても別は」（六〇四）、「さても命は」（八一八）、「さても月すむ」（一二四〇）のように、「さて＋体言」という形が増えてくる。⁽⁹⁾その流れは『新古今』にも継承され、「さてもいくよか」（六五二）、「さても杉のいは」（一六二二）の例が見られる。六例中二例が体言、三例が副詞、一例が用言に続く。この用言に続く例も「よひのまにさてもねぬべき月ならば」（四一六）であって、意味上の直接的なかり受けは「さても（ねぬべき）月」と考えられ、三代集時代の用法とは趣を異にしている。「さてや恋路に」は、先行例のない表現ではあるが、「さて＋体言」の発想の流勢・定着の中にあつて、耳慣れない表現ではなく、むしろ、確かさ、表現上の安定性をもった表現として受け取られるものと思われる。

(6) 『宮河歌合』 廿一番 右

水湛ふ入江の真孤刈りかねて空手に過ぐる五月雨のころ

「空手に過ぐる」といへる、いづれも云ひ知りて

きこえ侍れば、よき持に待めり

「空手に過ぐる」に対して「いひしる」と言う。この表現も『万葉集』、八代集中には見出せない表現である。一首は水をたたえた入江の真孤は、五月雨のため刈ることも出来ずに、何の収穫もなく、何も持っていない手に月日が過ぎ、五月雨が降りそそぐ、五月雨の降る頃はこの内容である。五月雨の降る頃の真孤を刈り取ることの出来ないむなしさ、無為の時を詠む例は

①さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまも
あらじとぞ思ふ (『後拾遺』夏・二〇六 さがみ)

②さみだれにぬまのいはかきみづこえてまこもかるべき
かたもしられず (『金葉』夏・一三五 参議師頼)

③五月雨はおふの河原のまこも草からでや波の下にくちなむ
なむ (『新古今』夏・二二一 入道前関白太政大臣)
に見ることが出来る。但し、『後拾遺』歌、『金葉』歌は、

刈り干すことの出来ない歎きをそれぞれ、「かりほすひまも

あらじ」「まこもかるべきかたもしられず」と刈り干すこ

とが出来ないということと表現している。又、『新古今』

歌も五月雨のため、真孤が朽ちることの歎きを「からでや

波の下にくちなむ」と朽ちる事実を言うことで表している。

例歌はこうした歎きを直接的にはうかがうことは出来ない。

又、五月雨を詠じた「五月雨に物思ひをれば郭公夜ふかく

なきていづちゆくらむ」(『古今』夏・一五三 紀とものり)、

「ほととぎす雲ゐのよそにすぎぬなりはれぬ思ひの五月雨の

比」(『新古今』夏・二三八 太上天皇)に端的に見えるよ

うな「晴れぬ思い」が、例歌に歌われているわけではない。

例歌は客観的な叙景表現がなされているが、注目すべきは

五月雨を「過ぐ」と捉えている点である。例は多くはない

が、「五月雨」は「つづく」「ふる」と表現され、「過ぐ」

は例がない。「過ぐ」は時雨には用いられている。

①暁のねざめにすぐる時雨こそもらで人の袖ぬらしけれ
(『千載』冬・四一七 紀康宗)

②たびねするいほりをすぐるむら時雨なごりまでこそと
ほさざりけれ (『千載』羈旅・五三九 藤原資忠)

③世にふるはくるしきものを楨の屋にやすくも過ぐるは
つ時雨かな (『新古今』冬・五九〇 二条院讃岐)

一時的な雨として、通り過ぎるものとしての描写である。同じ雨であっても、五月雨は降り続くものである点、時雨と同一には考えられない。「すぐ」の時雨ではない用例として、

① 長月の在明の月はあるがらはかなく秋はすぎぬべらなり
〔後撰〕冬・四四一 つらゆき

② いたづらにすぐる月日をたなばたのあふよのかずと思はましかば
〔拾遺〕秋・一五一 惠慶法師

③ みですぐる人しなければ卯のはなのさけるかきねや白川の関
〔千載〕夏・一四二 藤原季通朝臣

④ 故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな
〔新古今〕春下・一四八 大納言経信

のように、「秋」「月日」「人」「花の盛り」が過ぎるとして、これらが過ぐことの、むなしさ、はかなさが詠まれている。例歌の「空手に過ぐる五月雨」とは、「収穫のない、何も無い手に五月雨が過ぐる」と詠む中に、「すぐ」に内在する「むなしさ」の意によって、五月雨が降り続くことのむなしさが込められていると考えられ更に、空しく月日が過ぎることが意味される。時雨ではなく五月雨を「過ぐ」と表現する点に、歌の理り上、疑問が生じるが、「過ぐ」を用いたことによって、五月雨の降るむなしさが一首に込められ、

月日の過ぐることが想起され、伝統的発想を背景にした「過ぐ」の表現の確かさが理解されるのである。又、「いたづらにすぐる」〔拾遺〕一五一、「金葉」五九八、「ねぎめにすぐる」〔千載〕四一七、「花たちばなに風すぎて」〔新古今〕二〇二、「雲るのよそにすぎぬなり」〔新古今〕二三八、「おほかたにすぐる」〔新古今〕一五八七、「いたづらにすぎにし」〔新古今〕一六五五の如く、「過ぐ」の表現形式を見ることが出来る。例歌の「空手に過ぐる」もこの形式にのっとっていることによる、表現上の安定性がある。「五月雨過ぐ」は、一読、違和感を感じさせる表現であるが、理り叶う内容を有している表現である点で、確かさがあり、又、「過ぐ」の多くの例があることによる、詞づきの面においても表現上の確かさがあると言える。

(7) 『仙洞歌合』 建暦三年閏九月十九日 十一番

左 勝 範宗朝臣

長月やすゑの、原の色よりもなをかれまざる虫の聲哉
左歌心ことはかなひて。よろしくこそ侍めれ。

……末の、原は猶いひしりてみえ侍れは。以し左
為勝

「すゑの、原」に「いひしりて」を見ている。「末野」は

『金葉集』に「みかりするすゑ野にたてるひとまつとがへるたかのこゐにかもせむ」(三奏本・冬・二九六 藤原長能)の一例を見ることが出来るが、「すゑの、原」は短い句であるが、『万葉集』、八代集中には見出すことは出来ない。二十一代集中には、

①はしたかのすゑのはらのさくらがりしらふにはなのいろをまがへて

〔続古今〕春下・一一九 後鳥羽院御歌

②なが月もすゑのはらの花薄ほのかに残る秋の色かな

〔続千載〕秋下・五六九 平時敦

③さらにまたむすばはれたる若草のすゑのの原に雪は降りつつ

〔新後拾遺〕春上・一四 衣笠前内大臣

④身を秋の末のはらの霜がれに猶ふきやまぬ葛のうら風

〔新後拾遺〕恋五・一二四六 参議経宣

を見ることが出来る。

例歌の「すゑの、原」は初句の「長月の末」に導かれての「末野」という詞つゞきである。同じことは、二十一代集中の『続千載』『新後拾遺』の例にも見ることが出来る。又、『新古今』一五七二歌「花すすき秋のすゑばになりぬればことぞともなく露ぞこぼるる」(雑上・大藏卿行宗)も同様に考えられる。和歌史の上では、「末」は「秋のすゑ」

〔後撰〕一三二二、「かきねの柳すゑ」〔拾遺〕一〇三二、「ながれのすゑ」〔金葉〕五四六、「をぎのはもすゑ」〔詞花〕三三〇、「年もすゑ」〔千載〕五四三、「すべらぎのすゑ」〔千載〕六三六と詠まれ、「末野」のように「末の」と詠むことは伝統的な発想とは言えない¹⁰⁾。一方、「野の末」という詞も八代集中、見出し得ないが、『新古今』三七八歌「むさしのやゆけども秋のはてぞなきいかなる風かすゑに吹くらむ」(秋上・左衛門督通光)と武蔵野の末に吹く風に思いを馳せており特色がある。伝統的和歌発想に従えば、「野の末」「野末」であるが、そう表現されず、「すゑの、原」と表現されたのは、この例歌におけるように「長月の末」その「野原」であつて、「すゑの、原」という発想が初めからあつたのではないと思われる。「すゑの、原」は「末」の伝統的な詠まれ方から外れた詞つゞきであるが故の危うさをもつた表現であるが、初句からの意味の流れを通して、理りを有する表現となり、妥当な表現として了解される。「すゑの、原」という明快でありながら、問題をもつ表現も「長月の末の」「野原」を意味することによって、確かな表現となる。

(8)『百首歌合』六二番 秋 左 持 通光

ちりはて、木の葉をとなき山川の氷のよそにゆくあら

氷のよそに行嵐。いひしりてよろしく聞え侍よし
各申。

「よそに」は、『古今』十首、『後撰』十六首、『拾遺』八首、『後拾遺』五首、『金葉』五首、『詞花』五首、『千載』八首、『新古今』十九首と多く詠まれている。例歌の「よそにゆく」⁽¹²⁾はこの流れの中にあるが、嵐を「吹く」「立つ」⁽¹³⁾「さそふ」

ではなく、「行く」と表現するのは例がない。「き、ならはす」や「おぼつかなし」と否定される可能性もあるが、否定されなかつた。嵐は嫌われるものではあるが、又、「春の嵐」は桜を、「秋の嵐」は紅葉を散らし、その美しさを演出するものとしてある。⁽¹⁴⁾ 例歌はそうした嵐が吹いているのではあるが、冬のため、木葉もなく、又、山川の水も氷っているため、木葉も騒がず、川音もしない中、ただ嵐吹く音だけが聞こえているのである。そうした景に対して例歌は、散り果てた後の嵐の無意味さ、むなしさを表そうとして、作者は「氷のよそにゆく」と着想したのである。

(9) 貞永元年八月十五夜 二七番 名所月
『歌合』

右勝家長朝臣

君か代はめてゝもめてむ秋の月つもれとたれもわかの
浦人

つもとたれもわかの浦人。姿詞めつらしく。い
ひしりて聞ゆるよし各申。為勝

「つもれとたれもわかぬ浦人」は、『万葉集』、八代集中にはその例を見ることが出来ない。加えて、判詞に「姿詞めつらし」と評されているように、同類的表現を見ることが出来ない、独創的な表現と言える。例歌は、「秋の月つもれとたれもわかぬ浦人」と詠むが、道理的には「秋の月つもればたれもわかぬ浦人」ではないだろうか。「つもれど」という逆接表現は『千載』四五二歌「おしなべて山のしら雪つもれどもしるきはこしのたかねなりけり」（冬・治部卿通俊）に一例あるが、これは、一様に白雪は積もつてい

るけれども、白雪がはつきりしているのは越の高嶺であるという意であり、逆接的表現に論理性はある。それに對し、例歌は、秋の月を賞でることは月日を重ねるが、誰も彼も皆歌人となると意だと思われる。しかし、秋の月を賞でる月日を重ねると誰も彼も歌人となると方が理屈は通る。それだけに、例歌は飛躍した表現があると思われるが、『古今』八七九歌「おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの」(雑上・なりひらの朝臣)を本歌としている。本歌にいう、月を賞でることが積もると人の老いとなるということを受けて、それを逆接として受けたのが「秋の月つもれと」の表現なのである。秋の月を賞で続けると老いことになるが、そのことによつて、誰も皆歌人となることを、「秋の月つれもとたれもわかぬの浦人」は言い表しているのである。このように、一読、不可解と見える表現も、理り叶う内容を有する表現であると解することが出来る、その表現上の確かさを「いひしる」と評したものと思われる。

四

短い句に對して「いひしる」と評されることが多いことからもうかがえるが、「いひしる」は、簡潔・明快な表現

に對してなされる。そこには、伝統的同類表現を見ることが出来る歌もあるが、ない場合もある。同類表現を有す表現にあつては、伝統的古典的典型を示す叙景表現と言え、規範に即している意味での確かさを認めることが出来る。同類表現を有すことのない表現にあつても、伝統的慣例的発想をもとにしての、詞の圧縮・省略・変化による表現がなされている。その明快な表現の背後には、伝統的表現の確かさが内在しているのである。加えて、詞つゞきの面においても、発想・表現の形式において、規範的表現を踏まえており、表現上の安定性を得た確かな表現として解することが出来る。又表現にあつて、伝統的発想から逸脱した感のある違和感のある表現も、意味上、理り叶うと判断される確かさを有している。「いひしる」のもつ確かさは、和歌表現の伝統的原型が存在する確かさであり、一見、道理に外れる表現も、歌としての理屈に叶うことの確かさであつたと考えられる。

註

- (1) 安田章生氏は『藤原定家研究』(至文堂・昭和五十年刊)において、「宮河歌合」「千五百番歌合」「内裏歌合」「建暦三年閏九月十九日」、「建保二年八月十六日歌合」「百番歌合」「岩清水若宮歌合」「光明峯寺撰政家歌合」「貞永元年八

月十五夜歌合」「日吉社歌合」の九種の歌合を「信用すべき定家の判詞を有する現存の歌合」(六七頁)とされた。

- (2) 定家の自詠に対する評であるだけに額面通りには受け取ることが危険かもしれないが、一首の価値は別にして、「みちのくのしのおもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」(『古今』七・二四・恋四 河原左大臣)と比較する時、「めつらしき所侍らぬ」という評は客観性を保持していると思われる。

- (3) その理由は「心」を決定しないし、和歌らしい表現美をくわえる働きを持っている」(『歌論集』日本古典文学全集 四七二頁・頭注)と説明される。

- (4) 「青柳が風になびいて、まるで糸を燃り合せるように見える」(『古今和歌集』新日本古典文学大系)と説明されている。

- (5) 『続拾遺集』(四一・春上)に入集している。

- (6) 「わざもこがはかとつくれるあきのたのはつほのかづらみれどあかぬかも」(三・一六三 やかもち)

- (7) 『続後撰集』では、「こもまくらたかせのよびにさすさでのさてやこひぢにしをればつべき」(六九八・恋一)という違いがある。

- (8) その他、「さて」「さては」「さては」「さてさは」一例、「さてのみは」一例ある。

- (9) 十例中、「さて+体言」は五例ある。

- (10) 『万葉』には「梓弓末のはら野に鳥獵する君が弓弦の絶え

むと思へや」(二六三八)、定家には「手なれつつ末野をたのむはしたかの君の御代にぞあはんと思ひし」(『拾遺愚草』九九二)の詠がある。

- (11) 「はて」も同様に、「ゝのはて」と詠まれ、「はてのゝ」と詠む例はない。このように「末」「はて」は「ゝの末」「ゝのはて」と着想されるのが通例であったと考えられる。

- (12) 「くるまも待つべきよかはあだしの末葉の露に嵐立つなり」(『新古今』雑下・一八四七 式子内親王)

- (13) 「はなさそふあらしやみねをわたらんさくらなみよるたにがはのみづ」(『金葉』春・五七 源雅兼朝臣)

- (14) 「あふ坂やこずゑの花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら」(『新古今』春下・一二九 宮内卿)、「みよしののたかねのさくら散りにけりあらしもしろき春のあけほの」(『新古今』春下・一三三 太上天皇)、「ひねもすに見れどもあかぬもみちばはいかなる山の風なるらん」(『拾遺』冬・二二五 よみ人しらず)、「あらしふくみむろの山のもみちばはたつたのかはのにしきなりけり」(『後拾遺』秋下・三六六 能因法師)をあげることが出来る。

〔付記〕

テキストとして、『万葉集』は澤潟久孝氏『万葉集注釈』、勅撰集は『新編国歌大観』、『宮河歌合』は萩谷朴氏『平安朝歌合大成 八』、『千五百番歌合』は有吉保氏『校注千五百番歌合』、その他の歌合は『群書類従』、『近代秀歌』は『歌論集』(日本古典文学全集)を用いた。